

「長生きしてね、おばあちゃん」

藤田 仁誓ふじた にちか

ぼくとおばあちゃんは、とつてもなかよしだ。だから二人とも、このみがよくにている。大すきなきなこちを食べる時は、二人してそこらへんを、こなだらけにしなから「おいしいね。」と言つてわり合う。お気に入りの歌の「つばさをください。」を歌う時も、いっしょに歌つて、同じ所で歌しをまちがえる。おわらい番組とクイズ番組もいっつもいっしょに見て、ばくしよしたり、どっちが先に答えられるか勝負している。

おばあちゃんは、こしが悪くなつて、ボルトを十本入れる手じゆつをしたので、お医者さんから、あまりむりして動かないように言われている。ぼくは、おばあちゃんを助けるために重たい荷物がある時は、かならず持つてあげる。「大じようぶかい？ 重たいでしょう？」と心配してくれるけど、これでおばあちゃんももともとはたらき者だから、むりをしすぎて時々体調をくずしてしまふ。「みんなで手つだうから、むりしないでよ。」と言つても「それじゃみんなに悪いから。」と、速りよしている。この前も、おばあちゃんはまた具合が悪くなつて、ベッドで横になつていた。まゆ毛の間にしわをよせて、ずつと目をつぶつたままで、とてもつらそうだ。おばあちゃんが全せん目を開けないので、ぼくはだんだんなきそうになつた。それで早く元気になるようにパワーを送つてあげるために、おばあちゃんの手をぎゅつとにぎつた。「にっちゃん、どうした？」と、おばあちゃんが目をつぶつたまま言つた。ぼくがパワーを送っていると言つたら「ありがとね。」と、わらつてくれた。

おばあちゃんが元気だとして、家族みんながえがおになる。おばあちゃんは、みんなにとって太陽みたいなそんざいだ。だから長生きしてほしい。そこでぼくは、前からずつと考えていたことを思い切つておばあちゃんに話した。それは、しよう来ぼくがけつこんする時になつたら、けつこん式に出せきしてほしいということだ。ぼくのおよめさんも見つてほしい、おばあちゃんに感しやお手紙も読んであげたい。話し終つたら、なんだか急にはずかしくなつてきた。こんな事を言つたらわらわれないかなあと、ドキドキした。でも、おばあちゃんは「そうかあ。それじゃあおばあちゃん、がんばつて長生きしないといけないね。にっちゃんのおよめさん、どんな子だろう。楽しみだなあ。」と言つてくれた。にこにこしていたけど、ちよつとないてるみたいだつた。ぼくは、よろこんでもらえてよかつたなあと思つた。

おばあちゃんが、これからもずつと元気で長生きしてもらへるように、ぼくはもつとたくさんお手伝いして、おばあちゃんを助けてあげたい。そして、りつばな大人になつて、おばあちゃんにおん返ししたいと思ふ。